

2017 年 2 月 27 日

肺がんのリンパ節転移を確定診断するための医療用処置具 呼吸器科で使用するディスポーザブル吸引生検針を発売

オリンパス株式会社(社長:笹 宏行)は、呼吸器科で使用するディスポーザブル吸引生検針「ViziShot 2 (ヴィジ・ショット・ツー)※1」を 2017 年 2 月 28 日(火)から国内で販売を開始します。本製品は超音波内視鏡を用いて行われる「超音波気管支鏡ガイド下針生検」(EBUS-TBNA)に使われる針(処置具)です。

今回発売する「ViziShot 2」は、肺のリンパ節へ針を刺し組織・細胞を吸引するために使用される処置具です。従来製品「ViziShot」(2009 年発売)から、さらに機能を進化させ、肺のアプローチしにくい部位にもアクセスがしやすくなりました。また、針の素材や針先の形状を工夫し、組織への刺さりやすさを追求することで、より精度の高い診断の向上に貢献します。

超音波気管支鏡ガイド下針生検 (EBUS-TBNA:Endobronchial ultrasound-guided transbronchial needle aspiration) とは気管支で使用する超音波内視鏡を用いて行う検査方法で、治療方針を決める重要な手技です。口から内視鏡を挿入し、超音波で粘膜下の状況を確認しながら、直接内視鏡ではアクセスできない肺のリンパ節に針を刺し組織・細胞を吸引し採取します。採取された組織は顕微鏡などで良性か悪性かの病理診断を行います。

※1 本製品の愛称。販売名は以下「発売の概要(国内)」を参照

●発売の概要

販売名	発売予定日
ディスポーザブル吸引生検針 NA-U401SX (愛称:ViziShot 2:ヴィジ・ショット・ツー)	2017 年 2 月 28 日(火)

●主な特長

1. 針管の形状を改良し、到達困難であった気管支細部へのアクセスをサポート
2. 先端の斜面を鋭利に加工することで、穿刺性能が向上
3. ハンドルの新設計による使い勝手向上と、シース※2の着色化による観察時の針の見えやすさを追求

※2 針を覆っている部分



ディスポーザブル呼吸器用吸引生検針「ViziShot 2:ヴィジ・ショット・ツー」

製造販売元はオリンパスメディカルシステムズ(株)です。

●開発の背景

がんは日本人の死因の第1位です。その中でも肺がんは男性の死因第1位で近年も増加傾向にあります。超音波気管支鏡ガイド下針生検(EBUS-TBNA)は、肺がんのリンパ節転移の確定診断に貢献する検査手技として注目を集めています。今までよりさらに正確な診断を行うため、病変と思われる部位へ針を正確に刺すことが求められます。そのため内視鏡を目的の部位まで確実に近づけるとともに、狙った位置へ確実に針を刺す必要があります。今回開発した「ViziShot 2」はそれらのニーズに応えるために開発しました。

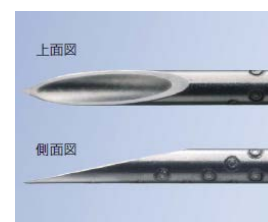
●主な特長の詳細

1. 針管の形状を改良し、到達困難であった気管支細部へのアクセスをサポート

喉から肺の奥までつながっている気管支は、奥に行くほど枝分かれして細くなっています。検査に使用する超音波内視鏡は先端部を大きく湾曲させて、細部の検査目的部位まで到達させる必要があります。同時に使用する吸引生検針は内視鏡の大きな湾曲に対応できる柔軟性が求められていました。今回、針管の設計から見直しを行い、また針を覆うシース材質にはコイルを採用することで、内視鏡を大きく湾曲させても容易に挿入できるよう工夫しました。これらによりアプローチが難しかった気管支の細部へのアクセスをサポートします。

2. 先端の斜面を鋭利に加工することで、穿刺性能が向上

組織へ刺さりやすくするため、現行製品と比べて、針先端の角度がより鋭角になるよう設計しました。これにより組織を採取する際に、穿刺をスムーズに行うことをサポートします。



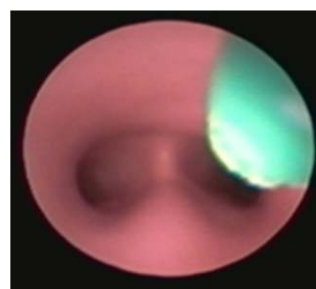
針先端部の形状

3. ハンドルの新設計による使い勝手向上と、シースの着色化による観察時の針の見えやすさを追求

手元の操作部は、人間工学に基づいて設計し、すばりにく使いやすいハンドル形状を採用しました。また針の出し入れには、2段階のロック機構を採用し、手技の安全性向上をサポートしています。さらにシースの先端部を色付けすることで内視鏡下の観察で見えやすくなるよう工夫しました。これにより、ハレーションによる視認性悪化が軽減され、針の突出の安全性をサポートします。



改良された手元操作部



内視鏡下の針の見えやすさ

本リリースに掲載されている社名及び製品名は各社の商標または登録商標です。